【土木計画学研究・講演集 No.16(1) 1993年12月】

伝説に現れる空間把握に関する基礎的研究*

A Basic Study on Grasping the Spatial Structure Appeared in the Legends

丹下真啓**・竹林幹雄***・東徹****・矢野誠吾*****・佐佐木綱******
By Masahiro TANGE,Mikio TAKEBAYASHI,Touru HIGASHI,Seigo YANO,Tsuna SASAKI

ABSTRUCT

This paper is to reveal how people in the old time grasped their 'space' and 'place'.First,this study based upon the 'Center/Fringe' theory,that Dr.YAMAGUCHI proposed,then making a model includingthat theory.It is consisted in the 3 areas of psycho.meaning,Inside,Boundary,and Outside.On the other hand,this study is based upon another model which is consisted in 3 areas found in the 'village', proposed by Dr.FUKUDA, MURA(regidental area),NORA(working areas especially for agriculture),and HARA(non developped areas).It was found that the co-relation between 2 models is able to be understood through the formative process of village.As the case study,we tried to reveal the semantics of the place through legends in Santo city,Siga Pref.Through the distribution of legends,wecould often find the 'boundariness'in the dot-pointed spaces/things that images are often focused in.Then,it was recognized that the semantic of the place,so called 'placeness',was not static,it wastend to be change in the history.After all,it was recognized that inside of the area was not so homogenious,and the place that was given the specified semantic(meaning)could be found in the village.

1．はじめに

多くの開発行為が機能性を高めることを主目的として行われてきたために、人々と場所との多様な関わりが失われてきた、との指摘がなされるようになって久しい。特に、都市の画一化、没個性化の進行は、近年、その指摘が一般的になり、農山村の活性化や美しい都市景観の創造の為に、個性的な街づくりへの要求が高まっている。

*ｷｰﾜｰﾄﾞ：伝説，中心・周縁論，境界

** 学生員 京都大学大学院 環境地球工学専攻
(京都市左京区吉田本町)
*** 正 員 工修 神戸大学助手 工学部建設学教室（神戸市灘区六甲台町1-1)
**** 正 員 工修 社団法人システム科学研究所
(京都市下京区四条烏丸西／住友生命ビル)
***** 学生員 京都大学大学院 環境地球工学専攻
****** 正 員 工博 京都大学教授 工学部環境地球工学教室

しかし、画一化、没個性化は機能重視の開発の弊害の一側面ではあるものの、その過度の強調は人々と場所との関係の多様性を考察するには十分なものではないのではなかろうか。地域の個性とは別に、日常生活に際し個々の場所は人々に対して意味を持っている。そうした意味で、人文地理学者であるＥ．レルフの次のような批判は重要であろう。「多くの施設計画や社会計画は、空間は均質であって物事は操作可能でその中に自由に位置づけられるという、暗黙の仮定に基づいている。」[1]こうした指摘のように空間を均質的に捉えるのではなく、場所の多様性、特に地域の開発に際しては、場所の共同主観的意味をプランナーが理解することが従来の開発行為の問題点を改善することに、少なからず寄与することになると思える。

そこで、本研究では、人々が持つ心理的な場所の様相を、共同主観的な立場から理解することを目的とする。

2．研究の方法

1）現在では、機能と技術を重視した開発が行われ、表層的な価値観が広く見受けられるようになった。そこで、人々が場所に深く係わっていた当時の様子を知ることが、場所の心理的把握を探るうえでは、現在に於いても有効なことだと考えられる。このことから、地域に密接に関わりながらその民衆によって語り継がれてきた伝説を分析対象とした。

2）上野千鶴子はその著書の中で共同体について次のように述べている。「共同体は外部に自らを投影し、かつ、それを拒絶することで、個人の析出と階層の差異化を拒否し、そのことによって変化を促す外部からの影響を斥け、安定した持続性を手に入れる。」[2]つまり、共同体における外部概念はその存続に係わるもので、共同主観的意味の根幹となる要素であると考えられる。

そこで、心理的な内部と外部との関係から、深層にある外部概念を意識化させる境界の重要性を示し、境界性を主眼とした2項対立概念をもって、人間の基本的な秩序観を整理した山口昌男の「中心・周縁論」[3]を基礎とし、心理的空間のモデル化をおこなった。また、その空間モデルに従い、伝説に現れる周縁性（境界性）を考察した。

3）「人間が圧倒的な自然によってとりまかれていたとき、地形のもつ意味は致命的な重要性をもった。信仰と地形との間には、敬虔ともいえる精神的な関係が存在していた。」[4]と指摘されるように、地形が人間の空間把握に与える影響は大きいと考えられる。そこで、伝説に現れる心理的空間把握と物理的な村落形態の関係を境界性を中心に考察した。その際、日本の村落形態の基本構造を表した福田アジオの「ムラ・ノラ・ハラ」モデル[5]を参考とした。

3．対象地域の選定

本研究の対象地域である山東町は、滋賀県湖北地方の坂田郡の南端部に位置する盆地であり、「山東盆地」、「関ヶ原低地帯」と称されている。主要産業は、近年、数社の工場が誘致されてはいるものの、伝統的な稲作を中心とした農業である。また、集落形態は集居集落であり、幕藩体制下の藩政村時代から大きな変化はなく、基本的に一村一集落形式が保存されている。

この地域は都市化に移行しようとする過渡的な状況にはあるが、集落形態としては、伝説が発生し信じられていた時代から大幅な変化が認められない。このことから、山東町を研究対象地域として選定した。

4．「中心／周縁」モデル

山口昌男は、文化の秩序概念は混沌と対の構造になっており、文化の全体性を捉えるには、この両者を対等にして、弁証法的に相互規定し合う概念として捉えることが不可避であるとしている。[6]

またその際、山口は、この秩序と混沌の概念対立をN．トルベツコイの二項対立概念を用いて整理している。[7]トルベツコイの二項対立は次の三つの入れ換え可能な方法で区別される。

1）各項は他に現れない要素を、共通の部分の他に持つ。

2）同じ質のものを違った度合で持つ。

3）徴のついたものとそうでないもの。

山口は、この三つ区別のうち、特に、第三の「徴付け」の対立に着目している。これは「欠性対立」と呼ばれるもので、「徴なし」項は、範疇全体か、または、「徴つき」項が他を切り捨てて残ったものとしての部分を示す。つまり、「徴なし」は意識にのぼることがなく、下位の類である「徴あり」が持っている属性のみが重要となり、「徴なし」の一部の範囲が、この下位の類を浮き立たせるために「徴」を付けられるのである。そうすることで、「徴なし」は「徴あり」と対立関係にはいる。

この「徴付け」の概念を用いて、山口は、秩序は「徴なし」項であり、他方混沌は「徴あり」の下位の類であるとしている。

更に、山口は、人間の意識の内側での世界像は、「この世界」を中心とした同心円を形成し、「この世界」に対する「彼方の世界」と、それを意識化させる円周（境界）とをもっているとする。[8]これが中心・周縁論である。

そこで、この「秩序」と「混沌」の二項対立を考慮し、集合を用いて村落における空間把握モデルを提示する。（**図1**）

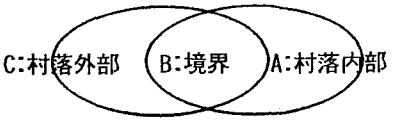


図１　心理的空間把握モデル概念図

集合を以下のように定義する。

Ｕ：心理空間についての全体集合

Ａ：心理的村落内部（秩序）

Ｂ：境界

Ｃ：心理的村落外部（混沌）

ここで、集合Ａは「秩序に従うもの」という特徴を有し、また、集合Ｃは「混沌としたもの」という特徴を有する。つまり、集合Ａと集合Ｃは二項対立する集合である。また、集合Ｂは「両義的なもの」であり、「秩序に従う」存在でありながら「混沌としたもの」という性質を併せもつものである。

５．伝説の空間弁別機能

本章では、伝説がもつと思われる、空間認知に関するその伝承者への影響を考察する。

空間伝承地域に深く関わってきた伝説は意思伝達のための媒体であり、また、物語の表層部分で語られた内容には、メッセージを間接的に伝える隠喩表現が用いられていると考えられる。そのため、そこに現れる対象には、伝説により何らかの意味が付与されると考えられる。そこで、その伝説のメッセージのうち、空間に関するものを伝説の空間弁別機能と呼び、前章の「空間把握モデル」との関連を整理する。

前章で整理したように、集合Ａは「秩序に従うもの」という性質を有し、また、集合Ｃは「混沌としたもの」という性質を有する。また、集合Ｂは「両義的なもの」という性質をもつものである。そこで、これらの集合の座標表示を考える。（図２）

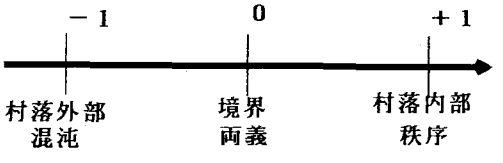


図２　心理的空間の座標表示

正の方向を「秩序に従うもの」、負の方向を「秩序に従わないもの」つまり「混沌としたもの」とする。また、便宜上「秩序に従う」、「混沌とした」という性質をもつものの成分を単位成分１とする。

この時、村落内部は＋１に、村落外部は－１に位置し、また、境界は原点に位置する。すべての空間内の場所は、この３点のいずれかに存在することになる。各集合を成分で表すと以下のようになる。

Ｕ＝｛＋１，０，－１｝、Ａ＝｛＋１｝、Ｂ＝｛０｝、Ｃ＝｛－１｝

ここで、伝説のもつ空間の弁別機能を論理変換ｆ(x)とする。伝説によって弁別される対象は集合Ａ、Ｂ、Ｃのいずれかに含まれる。つまり、論理変換としての伝説ｆ(x)は、その変換対象をｂ、変換後の対象をｂ’とすると以下のように関数表示できる。

ｆ(b)＝b’

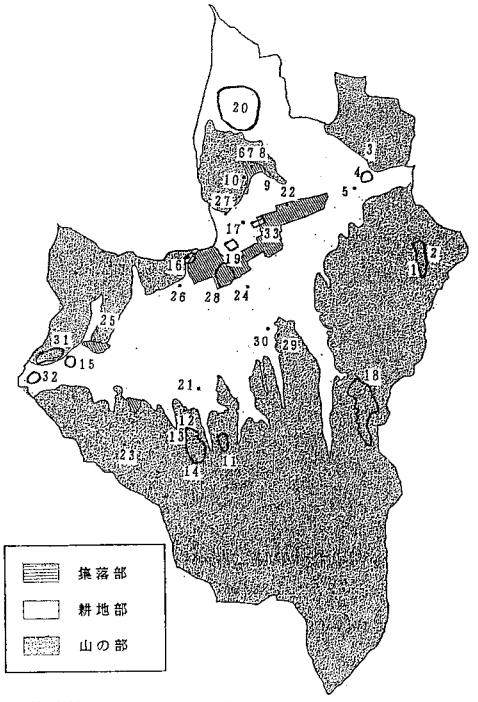
（但し、b、b’はともに集合Ｕに含まれる。）

対象ｂ，ｂ’はともに３点＋１，０，－１のいずれかの点であり、また、論理変換ｆ(x)は伝説の構成要素によって決定される関数と見なすことができる。この論理変換により、伝説によって説明された場所・地物が、集合Ａ、Ｂ、Ｃのいずれの集合に属しているかによって、場所・地物が伝説の伝承者に、いかに認識されていたかを示すことができる。

もっとも、論理変換が行われた前後でｂとｂ’が同じ集合に属している場合も考えられる。このような場合は、その地物・場所に伝説が付加的な意味を付与することを通じて、その対象物の再認識が行われたと考えることができる。また、村落外部（集合Ｃ）は混沌としたものであり、「彼方の世界」のものである。それは、純粋に人間の意識下のものであると考えられるため、実際には伝説の対象物がここに属することはない。

６．伝説に現れる心理的「境界性」

本章では、村の秩序を支える機能を果たす「徴付け」された心理的「境界」に着目し、４章で整理した心理的空間把握モデルの「境界」に対応する場所・地物を伝説から抽出し、その対象物が物理的な村落形態のどのような箇所に位置するかを分析する。



1 娘の神様　2 伊弥ヶ谷　3 白清水
4 蘇生寺あと　5 笠地蔵　6 安産柿
7 成菩提院の山門の竜　8 成菩提院のぼたもち　9 字・小野
10 念仏堂　11 君ヶ谷　12 明星輪寺薬師如来
13 境内の清水　14 明星山　15 蒐蒲が池
16 柏原御殿　17 恵比寿神社　18 糖糖木
19 冥浦屋敷あと　20 葉広　21 王神さん
22 柿沢薬師　23 岩ヶ谷の天狗岩　24 王塚
25 白山神社　26 一里塚あと　27 比丘尼地蔵
28 八軒町のうまや　29 西行法師の供養塔　30 永明寺
31 カンジョ林　32 小川の岡　33 本陣・脇本陣あと

図３　大字別「境界」プロット図（柏原）

注）ﾌﾟﾛｯﾄは山東町30大字全てに行ったが、ここでは１大字について示す。

ここで用いた伝説は、山東昔話編集委員会・編、山東町史談会・発行の「山東昔ばなし」及び「続・山東昔ばなし」に収録されているもので、その総数は280話である。

まず、前章の伝説の空間弁別機能を考慮し、伝説の対象物を、その記述から「村の秩序に従うもの」、「秩序に従わないもの」（「徴あり」のもの）という２項対立に着目し、２分した。この対象物のうち秩序に従わない記述が認められたものは、両義的なものであり、「境界」（集合Ｂ）に属するものであるといえる。また、異人は周縁を意識させるものであり、民族学では老人・女・子供は構造的に常に周縁人として組み込まれているものだとしている。[9)10)] このことから、これらの周縁を隠喩的に示す者が係わる対象もまた「境界」に属するものだと考えられる。

これらの「境界」に属する対象物の総数は337個であり、その内16個が「雨ごい歌」や「昔の笑い話」などを題材としたもので、場所と結び付かないものであった。よって、以下では残りの321個の場所対象事物についての分析を行う。

ここで、民族学において福田アジオが提示した村落領域の同心円構造が日本の農村の領域構成の基本構造であることを踏まえ、「境界」の意味を持つ場所対象物がいずれの領域に属するかを考察する。

福田は村の領域構成が以下のような３重構造を有していることを明らかにした。[11)]

１）「民居の一集団」＝集落＝定住地＝ムラ
２）「耕作する田畠」＝耕地＝生産地＝ノラ
３）「利用する山林原野」＝林野＝採集地＝ヤマ（ハラ）

そこで、心理的「境界」である対象物が、上記した「ムラ・ノラ・ハラ」のいずれに属するかを明確にするため、国土地理院発行の1/10,000図にプロットした。（**図３**）また、伝説が発生した当時と現在の状況が異なっていることを鑑み、山東町史及び山東小字界図を参照し、「境界」が「ムラ・ノラ・ハラ」のいずれの領域に存在するかを判断した。その結果を**表１**に示す。

表１　「境界」の形態的特性

	点	線	面	山	計
村	20		4		24
村～耕地	4	1	5		10
耕地	38	6	13		57
耕地～山	22	6	14		42
山	59		17	21	97
合計	143	13	53	21	230

プロット可能であったものは、全対象物の71.6%に相当する230箇所であった。また、**表１**では対象事物

の形態を明らかにするために、①点状の事物、②線状の事物、③面状の事物、④山の４つに分類して表示した。ここで、第４の形態である「山」は山の斜面一帯という面的要素と、平野部から臨まれる点的要素を併せ持っているため、特に「山」という範疇を設定したものである。①点状の対象物には樹木、石、地蔵等が含まれ、また、神社・寺はある程度の面的広がりは持つものの、シンボルとしての意味が強いことから点状のものとした。②線状のものは主に道路、河川であり、③面状のものには遺跡、屋敷跡が多くみられた。

心理的に「境界」に属する事物はその形状別にみると点状のものが多い。これは、点状の事物がイメージの集中を受けやすいためだと考えられる。

また、「ムラ・ノラ・ハラ」の村落形態別にみると、ムラからノラ、ハラと村落の外部にいくにしたがって増加する傾向があることが分かる。

このことに関しては、柳田國男がその著書の中で村の領域獲得についての以下のような記述がある。柳田は村落の領域は１）自然地形、２）耕作地の開発によって決定されるとしている。[12)]つまり、行政単位となった村は国土のいかなる場所もいずれかの村の所有するところとなるような、分割の概念となった。しかし、それ以前は民居を中心とする村が、開発した耕地までを村であると認識していた。そのために、所属不定の山野がたくさん存在していたのである。このことから、所属の決まっていない不安定な場所が、より境界的意味を付与されやすかったと考えられる。

しかし、心理的な「境界」は村の形態のうえでは秩序の中心と考えられるべきムラ（集落部）にも認められる。そこで、以下では地理的には非常に近付きやすく、日常生活にも深く関わっていたと思われるムラ（集落部）が、どのようにして境界性を帯びていたのかを考察する。

ムラ（集落部）の中に心理的な境界性が認められる例として、「神体」が境界性を持つ伝説を考察する。なお、「ムラ」の領域が「境界」性を持つ24箇所の内、「神体」に関するものは６例であった。

ここでとりあげる話の要旨は以下のようなものである。

「村人以外の者（主として泥棒）が神体を運搬しようとする際、その途中で神体が急に重くなり、運搬が不可能となる。」

ここで、元来、「神体」は村人にとって神聖なものである。また、「神体」は村の中に鎮座している場合が多く、日常では心理的に村人を守る存在であり、これは村人の秩序にかなうものである。しかし、その「神体」が泥棒によって運搬（盗難）される。この泥棒は村の外からやってくる者で、村落内部の者から見れば存在は確認できるが、完全には把握しきれない者、つまり「境界」に属する者だといえる。秩序の中心であると考えられる「神体」も「境界」が作用することで、境界性を帯びることになる。また、さらに「神体」は移動されることで「急に重くなる」という村人には理解不可能な状態となる。このことから、「神体」の境界性は更に強められている。

次に、「神体」の移動について考察する。心理的境界性を付与された「神体」は泥棒という外部の働きかけによって、ムラ（集落部）から集落外部へ移動される。この「神体」のムラの中心から外部への移動により、「神体」は空間の上でも境界性を持つと考えられる。

以上を整理すると「神体」の境界性には次のような特徴が挙げられる。

１）村人と泥棒の両者に関係することから、**所属の境界性**がある。

２）心理的に村人を守護し、一方では、村人の理解不可能な状況（急に重くなる）になることから、**作用の境界性**がある。

３）集落部から集落外部へ移動することから、**空間上の境界性**がある。

以上のように「神体」には様々な境界的側面が認められ、心理的境界に属するものと判断できる。

また、このような心理的「境界」に属する事物が存在する場所は、境界的事物自身と同様、村人にとっては心理的に境界的意味を持っていたと考えられる（伝説の空間弁別機能）。ここでは、日常「神体」があった集落内部の地点と泥棒が移動不可能になった地点の２箇所がそれに当たる。

このように、心理的空間把握と物理的村落形態と

の関係を見ると、心理的「境界」に属する場所は、村落形成上は比較的不安定な「ノラ」、「ハラ」に属する場合が多いものの、安定していると思われる「ムラ」の領域（集落部）にも、存在することがある。「ムラ」の領域であっても、生活空間として一義的に捉えられていたのではなく、心理的には「境界」として人々に認識されていた箇所もあり、その領域全体が均質なものとはいえない。

以上の心理的「境界」に関する考察から、心理的な空間把握について得られた知見を整理する。

・伝説に現れる場所には、生活の場としてや、生産の場としての機能的な意味とは別に、村落の秩序観に関する重要な心理的意味があった。
・心理的境界性はイメージの集中を受けやすい点状の場所・地物に現れることが多かった。
・物理的な村落形態と心理的な空間把握の間には、村落の形成過程により説明される相関関係がみられた。
・一つの場所に関してみても、心理的意味は常に一定のものではなく、時間的に変化する場合が認められた。
・物理的形態では均質に見える領域内においても、心理的には特化された場所があることが分かった。

7．あとがき

本研究により、伝説が場所に対して与える心理的な意味、特に、文化全体を捉える際に重要な秩序概念を支える「境界性」についての考察から、場所の多義性に関してある程度の知見が得られた。しかし、言うに及ばず、伝説は永年にわたり地域に伝えられてきたものであり、これがその伝承者である地域住民に与えてきた影響は大きい。それは、場所に対するものだけでなく、地域住民の生活全般に少なからず関与してきたものであると思われる。よって、本研究が伝説の共同主観的な空間弁別機能のみに着目して行われたことは断っておかなければならないだろう。

また、上記したような理由から民話は心理的な空間把握に非常に有益なものである。しかし、他の事象から得られる見解との関連についても、今後、考察していくことが、様々な場所の意味を捉えるうえで重要なことだと思われる。

参考文献

1）E．レルフ：場所の現象学，筑摩書房，pp.153，1991．
2）上野千鶴子：構造主義の冒険，勁草書房，pp.94～95，1985．
3）山口昌男：文化と両義性，岩波書店，1975．
4）樋口忠彦：景観の構造，技報堂出版，pp.84，1975．
5）福田アジオ：時間の民族学・空間の民族学，木耳社，1989．
6）山口昌男：文化と両義性，岩波書店，pp.66，1975．
7）山口昌男：文化と両義性，岩波書店，pp.60～62，1975．
8）山口昌男：文化と両義性，岩波書店，pp.81，1975．
9）小松和彦：異人論，青土社，1985．
10）上野千鶴子：構造主義の冒険，勁草書房，pp.108，1985．
11）福田アジオ：時間の民族学・空間の民族学，木耳社，1989．
12）柳田國男：柳田國男全集２９，ちくま文庫，1990．